



泣かないで、おぼえていて。

忘れないで むかえにきて。





ここよりずっと遠い雲の上に
ひとりの黒うさぎがすんでいました。
明るい時間は雲のベットでねむり、
暗くなると雲の上から
星の原っぱへ出かけます。





もうずっと、ずっと昔のことでしたが、黒うさぎは一度だけ雲の下へ降りたことがありました。

黒うさぎの仕事は、星の原っぱをぬけて雲の下へこぼれ落ちてしまった星、その中でも大きな星を探して、もう一度雲の上へ戻してやることでした。でも、これはなかなか大変な仕事です。一度こぼれてしまった星たちは、

雲に戻ると雨に混じって大きな川になってしまうので、黒うさぎは

こぼれた時に欠けてしまった星たちの中に 手を入れなければなりません。欠けて尖った星たちは、黒うさぎの手にたくさんの傷をつけました。

ずっとずっと昔の黒うさぎは、こんな仕事が大嫌いでした。

痛くて辛くてどんなにがんばっても、誰にもほめてもらえませんし、何よりとても寂しいのです。



どうしてこんな雲の上に一人きりにいるのか、
黒うさぎには思い出せません。

思い出せないはずなのに、なぜだかとても哀しかったのです。

だけど、今では平気です。

黒うさぎは思い切って、欠けた星の川の中に手を差し入れます。

手がジリジリ痛みますがそんなことは気にせずに、

赤や青や黄や緑の星を、ザラザラと引っかきまわします。

黒うさぎの手が傷だらけになった時、

指先に大きな橙色の星のかげらが当たりました。

黒うさぎはにっこりして橙色のかげらをすくいあげると、

それを星みがき布で丸くなるまででいねいにみがき上げます。

星はとても堅いのでまん丸にすることはできません。

それでも汗をかくまでみがくと柔らかい楕円形になりました。



黒うさぎは楕円形になった橙色の星を
ポケットに大切に大切にしまいます。

その他にもいくつか良さそうな星のかげらを
それなりにみがいて麻の袋につめました。

今日の橙色の星は久しぶりの特別良い星です。

黒うさぎはこぼす前から心が浮き立つのを感じました。

ずっと、ずっと昔に

雲の下でした約束まであともう少し。

あと少しで黒うさぎはひとりぼっちではなくなります。

待ちどおしくて、待ちどおしくて。

黒うさぎはまた、星の川に手を入れます。



白うさぎは今日もベッドの上にいました。

外はとっても良い天気ですが、白うさぎのいる

部屋の中はランプの灯りが揺れるほかはまっ暗でした。

カーテンは閉めきられて、細い陽の光すら入りません。

白うさぎの世界は、朝でも昼でも夜でした。

皆が遊べる陽の下は白うさぎにとってあこがれの場所

であり、怖い場所でもあります。

白うさぎは 夜にならないと外に出られない病気でした。

陽の光に当たると火傷をしたように痛むのです。

毎日毎日明るい時間には、窓の外から楽しそうな声が聞こえてきます。

白うさぎは耳をたたんで、ベッドの中で暗くなるまでじっとしていました。

最初は何人かともだちがいたような気がしますが、

いつからかこの部屋にはおとうさんとおかあさんの他には、

お薬を持った先生しか来なくなりました。



毎日、毎日、毎日、毎日。夜の誰もいない時間だけが白うさぎの遊べる窓の外でした。

何もする遊びなんてありません。だって誰もいないのですから。

それでもおとうさんも、おかあさんも、先生も 外で遊べと言っていた。

ある時、白うさぎがぼうつと夜空を見てみると、

赤とか緑とかの小石くらの

きらきらしたかけらが落ちてきました。

夜の世界で初めて

色のついたものを見つけた白うさぎは

うれしくなって

それをかかえて

宝物にすることに決めました。

ずっと、ずーっと

昔のことです。



いつものように白うさぎが宝物を探していた時、夜の暗闇が動いた気がしました。白うさぎは怖くなって、じっと暗闇を見つめます。



するとその暗闇は自分と同じような姿をしていることに気づきました。

しかもその暗闇は白うさぎが探していた宝物を拾っているではありませんか。

白うさぎはびっくりするのとくやしいので、思わず大きな声で言いました。

「あなたはだあれ？それはわたしの宝物なの。お願いだから返してちょうだい」
すると暗闇はびっくりしたようにふり返って、

はじめてそこに白うさぎがいたのだと気づいたようでした。

それでも自分がどろぼう呼ばわりされたのだとわかると、

怒ったように言いました。

「君こそ誰だい？これはもともと僕の仕事道具だよ。」

なかなか戻ってこないから、こうしてわざわざ探しにきたんだ」

白うさぎは驚きました。だってあの宝物は空から落ちてきたのですから。

この暗闇はとても嘘つきなのか、それとも本当に自分が暗闇の仕事道具を

拾って困らせてしまったのか、白うさぎにはわかりません。

「それが何かは知らないけれど、夜に色のあるものは初めて見たの」

「色のあるものなんて明るいところでは珍しくもないだろう？」

暗闇の不思議そうな声に白うさぎは泣きそつな声で言いました。



「それが何かは知らないけれど、

夜に色のあるものは初めて見たの」

「色のあるものなんて明るいところでは珍しくもないだろう？」

暗闇の不思議そうな声に白うさぎは泣きそつな声で言いました。

「明るいところは知らないの。わたしは夜しか外に出られない。

おしゃべりしたのもあなたが初めて」

うつむくと涙がポロポロあふれます。

こんな時間に初めておしゃべりする人があらわれたのだから、

ともだちになって と声をかければ

よかったと白うさぎは思いました。

ふと、顔に風があたります。

白うさぎが顔を上げると、そこには暗闇がつき出した手のようなものがありました。手のひらにギザギザした宝物がゆらゆら緑色に光っています。

「これは星のかけらだよ。雲からこぼれ落ちる時に地面にぶつかって欠けるんだ。

このままだとあぶないから、そんなに欲しいならみがいてあげるよ」

そう言うど何かをかぶせたのか、一瞬あたりはまっ暗になりました。

こんなに近くに、それも目の前にいるというのに、白うさぎには暗闇の顔が見えません。

もっと顔を近づければ見えるのかしら、と目をこらした時

暗闇が手の上にかぶせたものをどかしました。

見ると、さっきまでギザギザしていた宝物はツヤツヤとなめらかになっています。

ギザギザと好き勝手な方向に光っていた星のかけらは、

やさしくトロトロとした光に変わっていました。

「これでもう大丈夫。だから君も笑ってくれなくちゃ」

暗闇は白うさぎの手をとると、トロトロと光る星のかけらを

その手の上にそっとのせてくれました。



やっぱりわるいのは自分だったのだと、

白うさぎは恥ずかしくなりました。

「ありがとう。それから、ぐめんなさい」

白うさぎがあやまると、暗闇は声を出さずに笑ったようでした。

「別に悪気がなかったらいいんだよ。」

それに僕が探していたのはもっと大きなかからだから」

暗闇はやさしく言いました。

「それに、君がこれを宝物だと言ってくれて嬉しかったんだ。

僕の仕事は無駄じゃなかったんだから」

思いがけない言葉に白うさぎは暗闇の手を握りました。

「無駄なはずがないわ。あなたがこれをこぼしてくれるから、

わたしは夜でもひとりでも、こうして

外を歩くのよ」



何も無いと思っていた白うさぎの世界を

暗闇がこぼす星は

陽が射すカーテンの向こう側の世界のように

変えてくれました。

白うさぎが力を込めて握る手を

暗闇がじっと見つめています。

握り合った手のすき間から、

緑の星はトロトロと淡い光を放っていました。

「——君がもしも寂しいなら」

暗闇はそう言うてからまた少し黙り込んで

何かを考えているようでした。

「——君も、もし寂しいなら」

消え入りそうな声で暗闇は続けます。

「僕と一緒に行ってしまっかい？」

暗闇は白うさぎの手を握り返して言いました。

「もちろん 雲の上にだよ」

白うさぎはとても嬉しくなって、

もちろんよ、と言いかけてました。

一けれど、どこかでおとうさんの呼ぶ声がします。

一泣き出しそうなおかあさんの呼ぶ声がします。

ほんの一瞬、

白うさぎは暗闇から目をはなしてしまいました。

すると急に握っていたはずの手は、

星のかげらの感触だけになりました。

「待って。エエエ行っちゃったの」

白うさぎはおとうさんとおかあさんの声を振り切ろうと原っぱを走りました。



「今はまだ、君を呼んでる人がいる。」

だから連れてはいけなければならないけれど、約束するよ」

どこからか、暗闇の声だけが聞こえます。

「雨降りや雪の日は無理だけど、晴れている日は外に出て。」

特別大きな星のかげらを 欠けないように

雲にくるんでこぼすから」

白うさぎは泣きました。

泣きながら暗闇の声に大声で返します。

「そんなのいらないから連れてって。」

ひとりぼっちはもういやなの」

手の中にはトロトロ光る緑の星のかげら。

空には月と、砂糖を散らしたような星。

「だれも君を呼ぶ人がいなくなったら、
僕がこぼした星と雲で合図して。」

今日みたいな夜にそれを広げて待っていて。

そしたら僕は飛んで来るから。きっときっと。

約束するよ」

それだけ言うと、暗闇の声は

もうどこからも聞こえなくなりました。

白うさぎはその場にしゃがみこんで泣きました。

手の中ではトロトロと、

緑の星のかけらがやさしく光ります



うしろからおとうさんが駆けてきました。

おかあさんが抱きしめてくれました。

ふたりとも口々に「寂しかったのね」となぐさめてくれます。

けれどもそれは半分当たりで、半分違うのです。

暗闇とわかり合えた寂しさの形は、白うさぎの心の中で、いっとう強く光ります。やさしく白うさぎをなでてくれる二人の腕の中、寂しいのか、と聞いた暗闇の声がいつまでも耳に残るのです。





今日も白うさぎはベッドの上にいました。

外はとっても良い天気ですが、白うさぎの部屋の中はランプの灯りが揺れています。

閉めきられたカーテン、細い陽の光すら入らない部屋で、

白うさぎはベッドの上で編み物をしていました。

けれど白うさぎのベッドの上は銀色に輝く細い糸と、色とりどりに光る小石たちのせいで窓の外と変わらないうらいにぎやかです。

白うさぎは金色のかぎ針で銀色の糸をすくっては編み、時々、光る小石をその中に編み込みます。

そうして編まれた銀糸と光る小石は美しいレース編みのようですが、どうにも大きすぎるようで

ベッドの上といわず部屋中をおおいつくすほどでした。

それでもそんなことは気にも止めずに、白うさぎはひと目ひと目 ゆっくりといねいに編んでいきます。

ずっと、ずっと、ずっと昔。

白うさぎの世界は朝でも昼でも夜でした。

白うさぎはそんな毎日が嫌いでした。

けれどいまとなつてはそんなこともありません。

だんだん見えにくくなってきた目を細めながら

細い銀糸を切つてしまわないように、

たいせつにたいせつにひと目ひと目を拾つていきます。

昔は毎日、この部屋におもしろい本やおいしいお菓子を

持ってきてくれたおとうさんは、もう来ません。

昔は毎日、この部屋に花を飾つて抱きしめてくれた

おかあさんはおかあさんは、もう来ません。

昔は時々、この部屋に苦いお薬を持ってきた先生は、

若先生になりました。



たまに部屋にやってくるのは、

お使いを頼まれてくれる若先生の奥さんと、

白うさぎが編むレースを

買い取ってくれる雑貨屋さんだけでした。

あの頃とは少し変わってしまった生活に、

白うさぎはうっすらとほほえみます。

あの頃は毎日毎日、

明るい時間のあいだ中ずっと、

耳をたたんで暗くなるのを待ったものでした。

けれど約束したのです。

もうずっと、ずっと前のことなのに、

まるで昨日のことのようにも思えます。

あれからは夜になると

原っぱにとび出して銀色の雲を探しました。

銀色の雲の中には

いつも違う星のかけらが入っていました。

これをどうやって合図にしようか、

とてもむずかしい問題です。

銀色の雲は

まるで上等の絹のような手触りだったので、

糸車で紡いで糸巻きにしました。

おかあさんにねだって

毎日編み物をならい、

大きくなれば原っぱに広げに行きました。



けれどやっぱり約束どおり、

白うさぎの名前を呼ぶ人がいるかぎりは

何の返事もないのでした。

白うさぎの編み物の腕前は

この辺りで一番になりました。

昔よりも聞こえにくくなりましたが、

それでも耳をすましていれば

窓の外の音だって聞こえます。

白うさぎはこの前の夜に落ちてきた
いっとう大きくてとくべつ良い橙色の星を
手にとりました。

すっかり角が取りのぞかれて、

やさしい楕円形をした橙色の星は

白うさぎの手の中で

夕日の名残のような光をこぼします。

もちろん夕日を見たことのない白うさぎは

小さな頃に読んでもらった絵本で見た色しか知りません。

だけどきっと、こんな色です。

こんな風に、泣きたくなるようなやさしい色です。

だからこれは暗闇からの合図だと白うさぎは思いました。

やっと約束のときがきたのだと。

白うさぎは窓の外の声に耳をすませます。



皆が皆、親しい誰かと呼び合う声がします。

その中に白うさぎを呼ぶ声はもうありません。

白うさぎはもう一度、

手の中の橙色をした星のかけらをなでました。

しばらくそうしていましたが、

やがて金色のかぎ針を持ちなおすと、

銀色の糸をくりながら

最後の星を編み込みました。

部屋をうめつくす銀糸と色とりどりの星々は、

まるで夜空の川のようにです。

うっとりとながめながら、

白うさぎはまどの外の橙色をした空が

まっ暗になるのを待つのでした。



いつもそうしているように、

黒うさぎは雲の原っぱから下を見下ろしていました。

あの子に橙色のあの星が届いたのかを確かめるつもりでした。

だから最初にそれを見つけたときにはなにかの間違いかと思って、
目がチカチカするくらい強く閉じました。

はやる心を抑えてもう一度みを乗り出します。

そこはずっと、ずっと昔に一度だけ降りたあの原っぱでした。

大切な、大切な約束をしたあの原っぱでした。

みおろす先に夜の暗さはありません。

「合図だ……」知らずにこぼれた呟きがふるえます

見下ろす先はここと変わらない空でした。

色とりどりの星のかけらでできた、

ここよりずっと素晴らしく美しい星の川でした。

「合図だ。あの子からの合図だ」

くろうさぎは嬉しさのあまり、雲の上から飛び降りました。

ぐんぐん飛び降りた雲が遠ざかります。ぐんぐんあの子の星の川が近づきます。

それを見上げている影が見えました。

あの頃からずいぶん姿は変わってしまったけれど、それは間違いなくあの白うさぎでした。



「ほんとうに来てくれたのね」

色とりどりの星の川に降り立った黒うさぎを見て、白うさぎは言いました。

もつずっと、ずーっと昔に一度、言葉を交わしたきりなのに、

その声はまるで昨日も遊びに来た友人に向ける向けるような、穏やかで親しげな声です。

だから黒うさぎもそれにならって言いました。

「それはそうさ。あれからずっとずっと君のことを見ていたんだもの。」

言っただろう？君の合図で飛んでくるよって」

淡い光の星の川。

その上でふたりは初めてお互いの姿を見ることができました。

「あなたは黒いうさぎだったのね」白うさぎが言いました。

「君は夜の暗がりの中で真っ白に見えた」黒うさぎはそう言いつつ、

白うさぎをまっすぐに見つめます。

不思議なことに黒うさぎの瞳に映る白うさぎの姿は約束の日、そのままでした。

ふたりの足下でほしの川が揺らぎます。





不思議なことに黒うさぎの瞳に映る白うさぎの姿は

約束の日、そのままでした。

ふたりの足下でほしの川が揺らぎます。

ゆらゆらと淡い光を放ちながら星の川は原っぱから浮き上がり

月へ向かって伸び上がります。

「どういえばわたしたち、お互いの名前も知らないわ」

白うさぎが笑います。

「ぼくはすっかり自分のことを忘れてしまったんだ。

誰にも呼んでももらえなかったから」

黒うさぎの声が哀しげに沈んだのを聞いて、白うさぎは

陽気に言いました。

「わたしも忘れてしまったのよ。

だってあなたと約束したでしょう。

誰もわたしを呼ばなくなったらと」

星の川はもう月への道のように伸びています。

「あの月まで、僕も行っというと思うかい?」

「あなた以外に いったいわたしは誰といくの?」

黒うさぎの手を握った白うさぎは、

傷だらけのその手をやさしくなでます。

「やさしい、やさしい、やさしいあなた。」

あの日わたしを見つけてくれた。ひとりじゃないと

おしえてくれたわ」

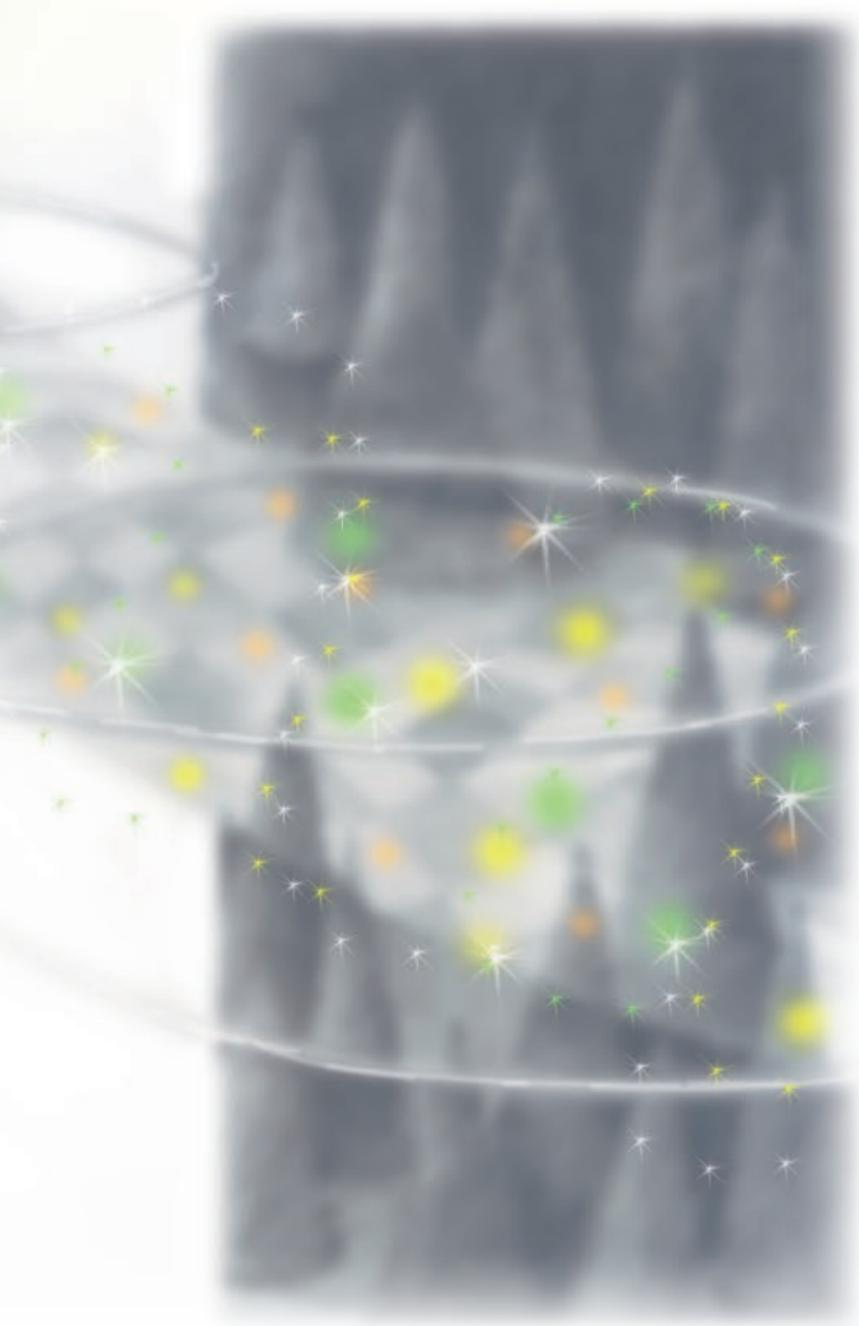
今はもう、星のひとつも持たないその手。

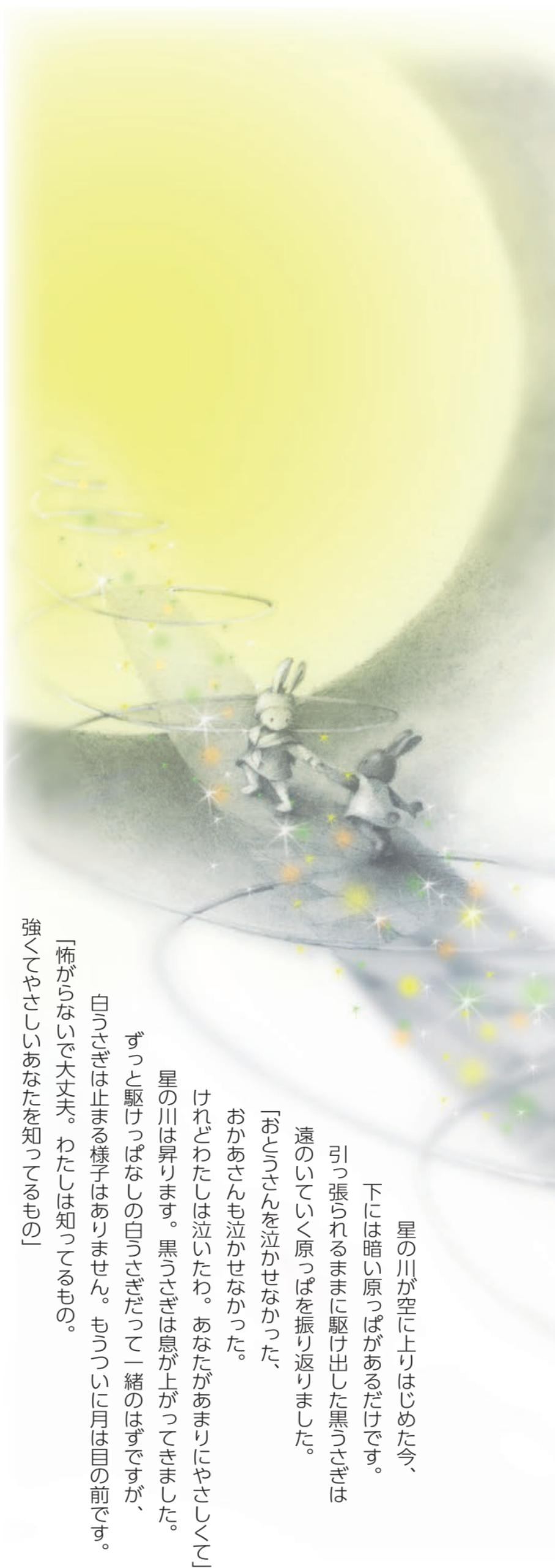
「星の降る思う降る、あなたの涙が。わたしはいつか駆けて行って

あなたに言いたかったの」

傷だらけの手をいたわりながら、それでも白うさぎは力を少し込めて

星の川を駆け出しました。





星の川が空に上りはじめた今、
下には暗い原っぱがあるだけです。

引っ張られるままに駆け出した黒うさぎは

遠のいていく原っぱを振り返りました。

「おとうさんを泣かせなかった、

おかあさんも泣かせなかった。

けれどわたしは泣いたわ。あなたがあまりにやさしくて

星の川は昇ります。黒うさぎは息が上がってきました。

ずっと駆けっぱなしの白うさぎだって一緒のはずですが、

白うさぎは止まる様子はありません。もうついに月は目の前です。

「怖がらないで大丈夫。わたしは知ってるもの。

強くてやさしいあなたを知ってるもの」

星の降る降る。

泣かないで、おぼえていてと。

雲を編む編む。

忘れないで。迎えにきてと。

「世界でいちばん、あなたが大好き」

誰からももらったことのない言葉に、黒うさぎは一瞬、
疲れもぼうっと忘れてぼうっとになりました。



もうずっと、ずっと昔。最初にいたのは白うさぎ。

動けない黒うさぎの手をひいて、白うさぎは月の真ん中をくぐります。

瞬間、星の川はくだけ散り、いく筋もの流れ星となって地上に降りそそぎました。

残った銀色の雲の名残は月のまわりをたゆたって、月の虹になりました。

だから今でも白く、淡く浮かぶ月にうさぎの影が見える夜には

星の降る降る。虹の出る。

